

## 大学から



### 大阪大学 理事・副学長 東島 清

【大学プロフィール】緒方洪庵が1838年に設立した適塾を原点とし、1931年 大阪帝国大学として創設。2007年大阪外国語大学と統合。現在、吹田・豊中・箕面キャンパスに、文学部、人間科学部、外国語学部、法学部、経済学部、理学部、医学部、歯学部、薬学部、工学部、基礎工学部の11学部および大学院16研究科を設置。2024年に世界トップ30、2031年の創立100周年に世界トップ10の研究型総合大学になることを目標に掲げている。

## 求めるのは主体的、意欲的な態度

「入学時の成績はいいのに受け身の態度が目立つ」「言われたことはできるが自分から進んではやらない」

これは多くの大学関係者が今の学生に対して感じている本音です。この状況を何とかしようと、私が学部長を務めていた理学部では、主体的・能動的に疑問を解決する少人数プログラムなどを導入したうえで、より意欲的な人材を求め「研究奨励AO入試」を始めました。大学の授業についていける学力は担保しつつ、高校で課題研

究や課外活動に没頭してきたような人物を受け入れたかったのです。実際、入学した学生の多くは力を発揮してくれました。

これを全学部に展開するのが、2017年度より導入を予定している「世界適塾入試（下段参照）」です。これは各学部が実施するAO入試・推薦入試の総称であり、3年間で定員の約10%を受け入れる予定です。十数人を対象としたAO入試とは異なり、300人以上を選抜するには厳格な評価シ

大学入試制度改革や職業実践専門課程の創設など大きく変化している高等教育機関。その向かう方向について、また、高大接続・高専接続の観点から高校教育や「総合的な学習の時間」への期待についてうかがいました。

システムの開発を含め体制を一新する必要があります。クリアすべき課題は山積していますが、それでもやるのは今のままではこれからの社会で太刀打ちできないから。高校の先生方も、単に教科書をなぞるのではなく、さまざまな活動を通じてトータルな人間形成をしたいという思いがあるはずですが、大学に入るためには受験勉強という壁があり、そうした思いをゆがめていたという自戒の念がわれわれにもありました。

本学は一歩踏み出しましたし、ほかの大学もいずれそうなるはずですが、評価されるのはペーパーテストの成績だけではありません。高校でしかできない活動にも力を注いでほしいというのが、私が最もお伝えしたいことです。

もちろん、従来の入試も苦勞して作り込んでいるため、知識・技能、思考力・判断力などをきちんと計っている自負はあります。けれど、それに続く表現力や課題発見力、探究力そして協働性まで計ることができているかといえは不十分です。特に、これからは世界中の異なる分野の人と協力しながら未知の課題を解決していかなければいけません。総合的な学習の時間において、探究力や協働性などを育んでもらえるならば、それは大学が育てようとしている力そのもの。高大を通じて、そうした人材を育てていければと思います。高校の授業、とりわけ総合的な学

### 世界適塾入試

大阪大学の各学部で2017年度より実施予定のAO入試・推薦入試の総称。同大学では、藩や身分の違いを超え志の高い若者が切磋琢磨した適塾の精神を受け継ぎ、グローバル社会で活躍する人材を輩出することを目的に昨年「世界適塾」構想を打ちだしている。その趣旨のもと、従来の価値観や能力にとらわれない多様な資質を有する学生を受け入れるため、一般入試後期日程に代わって実施。基礎学力状況を把握するため大学入試センター試験の受験を必須とすうえで、高校の成績、国際バカロレア資格、TOEFL<sup>®</sup>、口頭試問等を組み合わせるほか、必要に応じて高校での自由研究活動、海外留学等の実績や、志望理由書や志願者評価書を活用し、能力、意欲、適性を多面的・総合的に評価する。

習の時間においては、ぜひ生徒の素朴な疑問を大事にしてください。一般に聞かれても「知らない」と答えます。研究とは無から始めるものなので、知らないことを恥とは感じないのです。一方、高校の場合、先生は教える立場ですから、生徒の問いに「知らない」とは答えないかもしれませんが、でも、知らないことは知らないでいいと思うのです。それがきっかけで疑問が膨らみ、自ら調べるようになるのですから。



## 教師が先回りしては育つ力も育たない

バス旅行を思い描いてください。運転手はプロですから事故の心配もなければ、ガイドさんの説明もそつがありません。けれど、次にマイカーで家族を同じ場所に連れて行こうと思っても、道がまったく頭に入っていないことに気が付きます。自分で地図を見ながら運転した道はいつまでも覚えているのは対照的です。

講義も同じ。一方通行の講義では理解が深まらないし記憶も定着しません。板書し、説明する授業で力尽き、満足するのは教師であり、学生はその間、頭を休めているだけです。

本学園は「ゼミ学習」(下段参照)という、今でいうアクティブラーニング型の授業を長年続けてきました。この授業では、疑問が生じると、その場で仲間質問ができます。質問される側も、人に説明することで、ますます理解が深まっていきます。

授業で対話をするためには、日常の人間関係も大切です。私たちが「資格」「就職」と並び、「キャンパスライフ」を教育の3本の柱に掲げているのもそのためです。クラブ活動や学校行事を通じて仲間意識が芽生えるからこそ授業も活発になり、協調性やコミュニケーション能力も自然とついていくのです。思考力や問題解決力などについて

も結果として身につくものだと考えています。教師が「自分で考えろ」と言っても思考は進みません。目の前の課題に対して手や口を動かさし、試行錯誤することが総合的に考えるということですから。総合的な学習の時間が、そうした力を育む時間だとするならば、ポイントは、いかに能動型の授業を展開できるかどうかでしょう。教師が先回りしては、せっかく育まれる力を削いでしまいかねません。

教師は基本的に話好きで、教え好きです。でも、いい教師は、率先垂範することで生徒の見本となるものであり、もつといい教師は、生徒の心に灯をつけるものだと思います。将来に希望の灯がともれば、自ら突き進んでいくはず

です。専門学校の場合、目的意識のベクトルが揃っているだけに、主体性や協調性も求められます。大規模な就職出張式や合格祝賀会を開いているのも、「自分も、先輩や仲間のようになれるかも」と実感してもらうため。公認会計士、税理士、公務員などを目指し、一人ひとり明確な信念のもとで勉学に励んでいます。なかには、震災で親を亡くしたことで消防官を志すことになった青年もいます。そうした学生たちが2年間同志として学び合う。その

### 接続の観点から、高校に何を求めるか

## 高等教育機関からの期待

取材・文／堀水潤一 撮影／有田聡子(P32)、竹田宗司(P33)

#### ゼミ学習

クラスを6~8人のグループに分け、学生同士が互いに教え合うアクティブラーニング型の学習法。疑問点や不明点を仲間同士で解決しながら学ぶことで理解を深める。学生の学ぶ意欲を引き出し、高い学習効果を上げるほか、問題解決能力、コミュニケーション能力、協調性、表現力なども身につくとされる。国家試験や資格試験に合格するための実践的な学習法として考案され、開学以来、今も立志舎グループのほぼすべての授業で取り入れられている。

#### 専門学校から

学校法人立志舎 副理事長

### 千葉一郎

【学校法人プロフィール】1979年設立。専門学校日本スクールオブビジネス、東京IT会計専門学校、東京法律専門学校、日本動物専門学校など、会計・法律・ビジネス・IT・動物系の専門学校を全国に23校展開。難関国家資格対策や公務員試験対策に定評がある。23校67学科が職業実践専門課程として認定。このほか、東京都墨田区に立志舎高校を有する。

姿に胸を打たれます。資格取得によって自信をつけ、就職に結びつけることは職業教育機関としての務めですが、それだけでは単なる就職予備校、資格予備校です。それに留まらない人間形成を、高校から引き継いで行うことも私たち専門学校校の使命だと考えます。

